



No. 107

ティー・ブレイク

Tea Break

花の季節

広島市は典型的なデルタ地帯で水も多く、気候も穏やかな良い所である。5月の連休中には、全国的にも有名なフラワーフェスティバルが開催される。我らのクライアントもブースを出すということもあって、旅行の計画を立てた。

いつもであれば、5月の連休中は実家のほうに行き、子供を従兄弟達に会わせて遊ばせるのであるが、広島旅行があるので連休中には実家には帰れないことを伝えながら、そのついでに親父の予定を聞くと、連休中には特に予定がなく暇だというので、「どうせ来ないだろう」と思って、社交辞令で「一緒にどうぞ？」と聞いてみた。すると、意外や意外、電話の向こうからOKが出てしまった。

実は、自分で所帯を持ってから親父と一緒に旅行に行くのは、これが初めてである。家族旅行ですら、数えるほどしかない。そんなていたらくであるから、自分で誘っておきながら言うのもなんであるが、今回の親父の行動を怪訝に思い、かなりの不安を抱えながら、旅路に着いた。

広島といえばやはり、まずは原爆ドーム、そして平和記念公園へと続く。途中の橋で川面から目を背けるようにして歩く父の姿が多少気にはなったものの、原爆ドームを経て原爆資料館へと到達した。そして、歩きながら父は、「見ちゃ、いらんねえな」と複雑な表情で呟いた。

そう言えば、子供の頃、父からB29や焼夷弾、防空壕などの話をたまに聞いた。そうか、焼夷弾による火災から逃れるために川に飛び込んだって言っていたよなあ。あの橋の上、川面から目を背けるようにして歩くわけだ。花でいっばいの祭典に沸く気候の良いこの地も、戦争を体験した彼にとっては、あまり心地良い場所ではないらしい。

「じゃあ、何で広島に来るなんて言ったんだろう」。あたりまえの疑問が湧く。

そんなことを考えている横で、ふと父が、「宮島に行きたい」と言い出した。修学旅行で非常につまらない思いをしたことを憶えていたのであまり気乗りがしなかったが、行くことにした。連絡船の中で、「あの心臓の弱かったカアさ

んが……」と言って、何かにつけて母の思い出を述懐していた。

帰ってから、伯母のところにと土産の品を持って行き、広島での話題に花が咲いた。伯母も伯母で、自分の妹である私の母の昔の写真を披露しては笑いあう。そのアルバムの中に、二人で仲良く写っている自分の両親の写真を発見した。日付は、自分が弁理士試験の受験生だった頃のものであり、そのためか、こんなところに二人で行っていたことなど、まったく知らなかった。背景は、ついこのあいだ行った宮島の厳島神社である。

そうか。行き先が広島だったから、だったのだ。広島だったから、息子に対する見栄も外聞も捨てて、二つ返事で来たんだ。そして、だから宮島だったのだ。そう言えば、あの日は厳島神社を遠い目で見つめていた。それは、もしかしたら、あまりにも早く別離をさせた恨み言だったのかもしれない。

花と水の祭典と、やきもち妬きの神様と、母の死を通じて新たに分かりあえることができた親子と。色々なものが揃った広島。その中で、自分で行きたいと言っておきながら、厳島神社への参拝だけは私と一緒に行くのを頑なに拒んだ親父。それが迷信をあげ笑った過去の反省から来るのであれば、よほど母の死が辛く、また、現在の我々の関係に対して感謝をしているのに違いないのであるが、そこはやはり昭和ひと桁。真相を聞くのは諦めるしかないだろう。

(正)



Bloom season